

## 岡山天体物理観測所 と共に



山下泰正

国立天文台 名誉教授  
(元岡山天体物理観測所 所長)

私どもの年代は岡山と共に育ってきた気がする。岡山ができるまでは、日本には太陽以外の天体について本格的な分光観測のできる望遠鏡はなかった。私達の学生時代には、大先生が、私の場合には、藤田先生がアメリカ、カナダで撮影された乾板を借りて来られ、それをお借りして測定したものである。その後、本郷の屋上にあった40cm望遠鏡に小型分光器を製作して明るい星のスペクトルを撮っていた。この経験は後で役立つように思う。

そのような時に 188cm望遠鏡ができて、自前のデータを撮ることができるようになったわけである。研究の進展と共に、これを知りたい、あれを知りたいということが起こるが、それに対応できるようになったわけである。以来停年まで、観測者として岡山のお世話になって仕事をしてきた。

岡山天体物理観測所は 1960年に発足した(年表参照)。初代観測所長の大澤先生、現地責任者の石田さん、清水さん、三鷹からは末元先生、近藤さん、西村さん、そして当時はまだ若かった現地の皆さんが望遠鏡の立ち上げ、調整、運用に献身されて、種々の困難を克服して、観測所の態勢は整えられた。以後40年になる。

岡山の地を選んだのは、勿論、星像が小さい、晴天の年間の偏りが少ないといった天文学的条件からだが、当時の三木岡山県知事をはじめ、地元の強力な誘致もあった。実は、これだけ誘致されたのは、国立天文台の施設のなかでも珍しいことなのである。地元では、鴨方町役場の秋田さん、倉敷天文台の本田さんに特にお世話になったとお聞きしているが、お二人とも故人になられた。三木知事は同じ手で、水島コンビナートも誘致され、数年にして空が明るくなって困った。知事は多分、天文台とコンビナートが両立しないことを御存じなかったものと思われる(?)。私達は誘致されたという立場で、県に観測環境維持への協力を要請した。その結果、恒常的な観測協力会議が持たれ、実効はなかなか上がらないが、各企業と話し合うことはできるようになった。

岡山の望遠鏡は 188cm, 91cm, 太陽の3台とも建設当初から実質的共同利用に供されてきた。現在の本格共同利用と違って、他機関には観測旅費は出せなかったし、観測計画の立て方も違っていった。また、

観測所経費の不足分を大学本部からもらっていた関係で、よもやこの経費を他大学の人に使わせてないでしょうねと云われたこともある。写真乾板などは少量では買えないので、観測所のものを使ってもらっていると理解を求めたこともあると、石田さんから伺った。当初、観測プログラムは東大、京大、東北大、及び東京天文台の関係者の方に集まって頂いて、プログラム会議を開いて決めていた。現在の委員会と違って、一日だけの出張依頼であった。そのため、会議の席上で伺ったご意見はその場でプログラムに反映させるのが難しく、来年以降考慮しなすとお答えすることが多かった。会議のその場で、プログラムを決めていただくのが趣旨だからである。

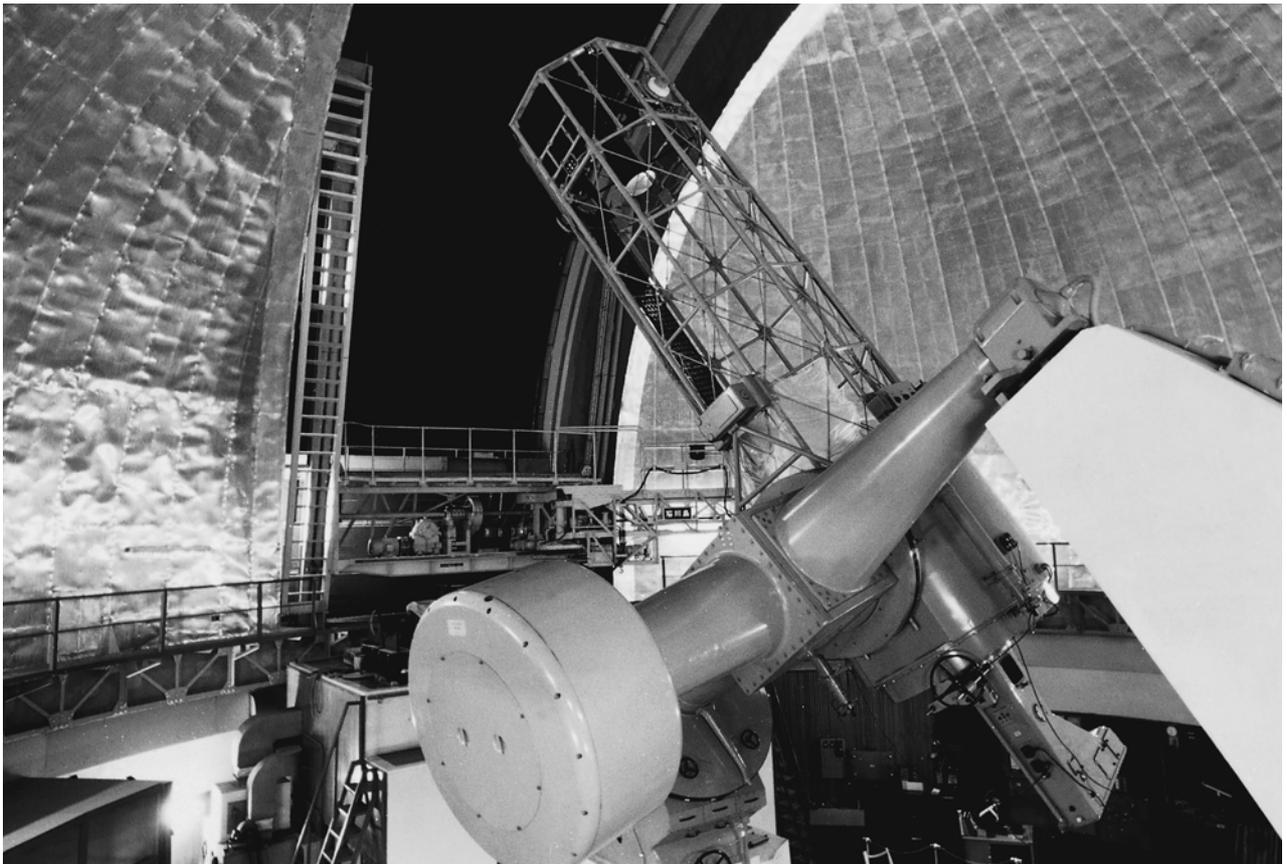
観測プログラムの判定条件は、どうすれば研究の実が最も上がるかだと考えたし、そう実行してきた積みである。果たして有意なデータが得られるかどうかといった難しい観測では、もう少し御本人に検討してもらいたくても、188cmが一台しかない状況では、それもかなわぬと悩んだ。研究成果は最も重

要だが、あまり論文、論文と言うと、応募者の方も確実に論文に書ける安易なテーマに移ってくる。これは研究の矮小化であって望んだところではない。現在のような恒常的なプログラム委員会になって、私の胃の痛みはずいぶんと解消された。

私が大澤先生の後、観測所長をお受けしたのは1976年からである。我が国の天文学の発展と共に、188cm望遠鏡が超過密になってきた頃である。また、二度のオイル・ショックを経て観測諸経費が目減りした頃である。皆さんにもご迷惑をお掛けしたと思う。

創設の経緯、初期の立ち上げ、及び40年間の研究成果については、それぞれの方に御寄稿いただいたので、そちらをお読み頂きたい。

岡山の次の望遠鏡をという私達の希望は、すばる望遠鏡で実現した。188cmから8mにジャンプできたのは、計算機の進歩によって、徹底的なシミュレーションが可能になったことと、長年にわたる岡山現地での技術的研鑽に負うところが大きかったと思っている。



HILGER & WATTS 社製のカセグレン分光器がつけられている188cm反射望遠鏡(1962年)